SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

令和5年度
図画工作科部『その子らしく学ぶ』研究2年次の成果と課題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学教育学部附属静岡小学校 公開日: 2024-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉山, 祥子, 渡邉, 翔太 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/0002000629

令和５年度　図画工作科部『その子らしく学ぶ』研究２年次の成果と課題

杉山　祥子　　渡邉　翔太

１．はじめに

１年次の授業実践を分析していくと、『その子らしく学ぶ』姿として仮定した３つの姿（表現にこだわる姿・自分なりの答えをつくりだす姿・自分の感覚を通して面白さを実感する姿）が学びのプロセスの中に必ず表出することが分かった。しかし、相互の関連性や順序性等はまだみきれていない所があった。そのため、３つの姿の相互の関連性や順序性等を見出したり、新たな『その子らしく学ぶ』姿を見出したりしていくために２年次は分析する視点を広げることとした。また、『その子らしく学ぶ』研究における「その子が、自分と対象とを結びつけながら進んでいく」という共通の見方を基に図画工作科部の研究の方向性について検討した。その中で、「その子のこだわりや選択・決定には経験が大きく影響しているのではないか」「様々な対象との出合いが何度も訪れ、その時にその子の直感が働いているのではないか」「その子に還るのは、五感を伴う経験なのではないか」と考えた。３つの姿を視点にするとその子が対象と自分を結びつける際の「対象とは何か」に注目してしまい、往還し続ける結びつきの中で起きている変化や繋がりまで分析しきれていなかったため、子どもの学びのプロセスを１年次よりも広く分析していくこととした。

また、１年次では、図画工作科部における『その子らしく学ぶ』を以下のようにおいていた。

その子らしさを表出しながら「もの・こと・ひと」に感覚を通して関わり合ったり、こだわって関わり合ったり、選択決定しながら関わり合ったりして、学びを繰り返して進んでいくこと

この図画工作科部における『その子らしく学ぶ』についても更新をかけていき、『その子らしく学ぶ』ことの子どもにとってのよさを明らかしていきたいと考えた。

そこで、教科研の実践では、「出合い」「直感」「こだわり」「選択・決定」「経験」「感覚」などを起点にその子の学びのプロセスを分析していくこととし、教科研で見出したことを協議会の視点として分析していくこととした。

２．研究の目的と方法

（１）研究の目的

①３つの姿の相互の関連性や順序性等を見出したり、新たな『その子らしく学ぶ』姿を見出したりしていく。

②図画工作科部における『その子らしく学ぶ』について更新していく。

③『その子らしく学ぶ』ことの子どもにとってのよさを明らかにしていく。

（２）研究の方法

①段階的な分析

教科研の実践では、３つの姿の相互の関連性や順序性等を見出したり、新たな『その子らしく学ぶ』姿を見出したりしていくこと・図画工作科部における『その子らしく学ぶ』について更新していくことを行った。それを受けて、協議会では、『その子らしく学ぶ』ことの子どもにとってのよさを明らかにしていけるよう分析した。

②分析資料について

実践した授業について、以下の４つを分析資料とした。

・動画、写真記録（実際の子どもの姿、板書）
・子どもの振り返り（音声・写真・動画・文・絵文字）
・授業後の教科部での振り返り
・教科部でまとめた「実践のあらまし」

③分析方法

分析資料をもとに教科部で子どもの学びのプロセスを丁寧に追い、分析した。分析結果を述べ

るにあたって、結果が何を根拠としているのかを示すため、逐語記録や授業場面の写真などを分析資料として併記した。

３．研究の内容

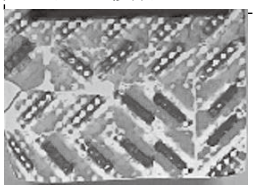
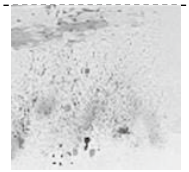
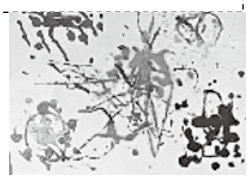
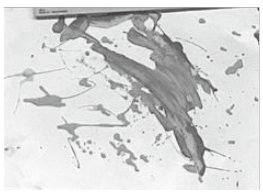
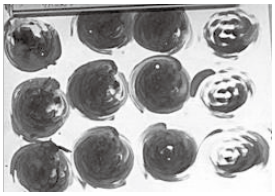
（１）２年「わたしの星から生まれた　みんなの宇宙」（A 表現(1)(2)イ　絵）

①題材の構想とその実際

空間としての表現が高まったり広がったりすることを体感することで、「様々な見方」や「様々な表現の意味や価値」のよさを感じ、その後の学びや生活を豊かにしていくことを願い、本題材を構想した。

本題材で扱った蛍光塗料は、粒子が細かく美しいマット調になる。また、不透明で乾くと下の絵がにじまず何度も塗り重ねることができる水性絵の具である。子どもたちは蛍光塗料という新たな材に出合い、半透明水彩絵の具や様々な道具と組み合わせてできる表現をたっぷりと試し、その表現の豊かさを楽しんでいった。更に子どもは半透明水彩絵の具と蛍光塗料の特性を比較しながら、相違点を見出していった。そして、蛍光塗料の「ブラックライトを当てると光る」という新たな特性に出合った子どもは、自然と手で暗闇をつくってより光を引き立たせようとしたり、暗闇で光る蛍光塗料とは逆に半透明水彩絵の具は暗闇ではどの色も黒に近くなることに気付いたりしていた。２種類の絵の具を組み合わせることで、自分達が描いたものが違う印象を与えることに驚き、暗所と明所で見え方を変化させる新たな表現のイメージをもっていった。そのようなイメージを抱いた子ども一人ひとりに箱型の段ボールを用意し、蛍光塗料を塗っていく造形活動を行った。箱型であることから外側の上部、側面だけでなく、内側に描くこともできる。子どもの中には、箱型の段ボールを重ねたり、覗き込んだり、すっぽりとかぶったりする子もいた。このような活動から、一方向から眺めるだけでなく表現の世界の中に入り込

表１　単元の実際

<table>
<tr><th>時</th><th>学習内容</th></tr>
<tr><td>①
②</td><td>〈２種類の絵の具・様々な道具との出合い〉
どんな絵の具かを様々な道具を使ってたくさん試して確かめた
２種類の絵の具
<table>
<tr><td>蛍光塗料</td><td>なめらか・ねっちり</td><td>薄い水色朱色</td><td>光って見える蛍光灯</td><td>乾きやすい</td></tr>
<tr><td>半透明水彩絵の具</td><td>べちゃドロッ</td><td>濃い</td><td>光って見えない</td><td>乾きにくい</td></tr>
</table>
・混ぜる色が同じでも違う色ができる
・ブラックライトを当てると光る
様々な道具
・スポンジに色を分けて塗ると模様ができてきれい
・スポンジを回すと色がぼやけた感じになる
・ブラシと網で細かい粒が飛ぶよ
・スポイトで垂らしたり飛ばしたりすると花火みたいになる。泡がはじけて模様になる
・ビー玉を転がすと面白い線が描けるよ
・蝋燭で描くと不思議な線
・画用紙に絵の具をつけて折りたたむと鏡みたいに同じ模様ができる
    </td></tr>
<tr><td>③
④</td><td>〈蛍光塗料が光った時の印象〉
・キラキラ光った　・青く光った　・稲妻
・色によって違う色で光る　・星みたい
・ラメみたい　・虹みたい　・信号みたい
・銀河みたい　・ブラックホール
・ホワイトホール　→宇宙みたい
〈前時の友達の作品を２枚鑑賞する〉
   </td></tr>
</table>

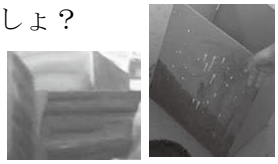
むような体験へと繋がっていった。箱の中に自分の空間が保障されることで安心して表現することができ、一人ひとりの箱の中にはその子だけの世界が広がっていった。ロボットの好きな子はロボットが住む星を、未知の生物が好きな子は見たこともないような生物の住む星を描いていった。今回使用した蛍光塗料は、ブラックライトの光を当てなくてもはっきりと色の違いを見ることができるため、光っていない時と光っている時の二通りの見え方を確かめながら活動を行うことができる。活動中、外からの光を遮断しブラックライトを当てて発光具合を確かめるスペースを作ることで、子どもが自ら表現の変化を大切にすることができた。蛍光塗料によって光そのものを描くだけではなく、光と対称にある闇の世界を捉え、主題に合った模様や形、変化の仕方について考えていく子どももいた。

私たちは、子どもが自らのおもいを実現させるために、素直に動き出す姿や自分の必要だと感じる情報をどんどん吸収し、自分のものにしていく姿に魅力を感じている。そのような子どものおもいや自分の世界と他者の世界を繋げていくことを支えるために、一人ひとりの星ができあがったところで、子どもは図工室というもう一つの大きな箱に出合う。すると今まで自分の箱の中に広がった小さな世界を見ていた自分が、大きな世界の中の一部になり小人の視点へと切り替わる。そして、自分や友達の世界が融合することでまた一つ魅力的な世界をつくりだせるということに気が付いていった。一つの世界をつくりだすことで、友達と共通する表現に気付いたり、自分とは違う表現の意味や価値をもっている友達の存在に驚いたりした。こうして共に空間をデザインしていく中で自分や友達のおもいを感じることができた。

③④

明るい所	明るい所
・赤の違いが目立つ ・綺麗な銀河みたい	・ふわふわしている ・ブラックホールみたいで吸い込まれそう
暗い所	**暗い所**
・赤だけでも光る所と光らない所がある ・赤色が黒っぽく見える	・明るい所と暗い所では違って見えそう！ ・周りだけが光っていた

・この中に吸い込まれそうでしょ？
・星空ができたよ！
・ブラックホールみたい
・段ボールの側面にスポイトで絵の具を垂らすとあみだくじのような模様になる
・垂れる時に色が混ざって新しい色ができていくよ



⑤ **〈大きな一つの段ボール箱になった図工室と出合う〉**

床や壁まで段ボールで覆われた空間に働きかけていった。床に惑星を描き惑星同士を繋げていく子や壁に無数の星を描き銀河をイメージしていく子がいた。また、自らの星を追究し続ける子もいた。これまでに手で２種類の絵の具の感触を楽しんできたが、徐々に足で感じる感触が新たな出合いとなり色やイメージよりも優先されていった。

⑥⑦ **〈わたしの　　星からみんなの宇宙へと広げよう〉**

・沼を宇宙にしていきたい、改造するぞ
・手形がロケットみたい・大きな星
・黄色のスポンジが星みたい
・誰かと組み合わせると面白い
・星の集まりだから銀河・ひみつ基地だよ
・メロン星　・UFO　・流れ星　・SL を作ろう
・ゴジ左衛門とゴジ子ちゃんが住んでいる惑星

⑧ **〈どうやってみんなの宇宙にしていこうかな〉**
・床に置くよ。でも、きれいな星がかくれないように考えよう・重ねてみよう　・飾り付けよう
・トンネルにして中を通りながら見てもらいたい
・ブラックライトを照らしながら覗き込むと小さい宇宙が広がって綺麗だよ

⑨ **〈鑑賞して気付いたことを生かして表現してみよう〉**
・上から見て形になるように並べる
・大きい箱の中に小さい箱を入れる
・色のない段ボールは暗い所では黒に見える。だから、上の段ボールが浮いて見えて惑星っぽくなる
・綺麗な所は角で隠して、見に来た人に紹介しようよ

②抽出児のプロセス

「自分と対象とを結び付けながら進んでいく」見方で抽出児のプロセスを分析し、図画工作科部の考える『その子らしく学ぶ』について再考した。

本校図画工作科部が考える『その子らしく学ぶ』とは、子どもが「いいこと思いついた。やってみよう」「こうしたらどうなるかな」「こんなものを表したい」などというおもいを抱き、「もの・こと・ひと」に働きかけたり想像力を働かせたりしながら、造形的な視点で表現することを楽しんでいくプロセスのことである。

同じ材と出合ったとしても、どのような表現に魅力を感じるのかは一人ひとり違う。今までの経験を基に「かっこいい」「かわいい」「力強い」「明るい」「優しい」「不思議」等といった抽象的なイメージの中から、直感的に表してみたいというおもいを抱き、自分なりの表現の意味や価値をつくりだしていく。そうして自分なりに納得した表現が、他者の表現と響き合うことで「なぜこのような表現にしたのか」と立ち止まったり自分とは異なる意味や価値に気が付いたりして、自ら選択・決定しながら表現の意味や価値を再びつくりかえていく。

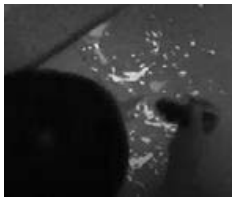
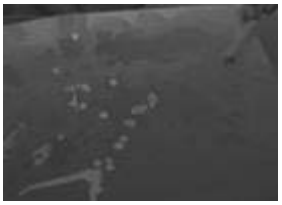
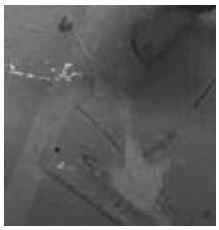
そのような学びのプロセスの中で、材の特性や主題を意識した造形的な見方や考え方を働かせていくことにより、表現の意味や価値が確かなものとなり、その子の感性が磨かれていくと考える。

ア　２種類の直感

本実践の抽出児の姿からその子が働かせる直感には「こうしたらこうなりそうだ」という経験に基づく直感と「こうしたらどうなるのだろう」という未知の表現を味わいたいという直感の２種類が存在していることが分かった。以下にＡ男の具体的な表れを記す。

表１－２　Ａ男の直感

時	経験に基づく、やってみようという直感	未知の表現を味わいたいという直感
① ②	**（半透明水彩絵の具の経験）** ・すぐに見た目の違いに気が付き、色や質感という基準で２種類の絵の具を比較する。 「粉みたい」「同じ青でも薄い青」 「黄色も薄い」「薄い蛍光色」 「蛍光塗料はすごく乾きやすいよ」 ・紙の上で色を混ぜていく ・ビー玉を使って紫をつくろうとする 「ビー玉がスプラトゥーンしている」	**（初めて見る現象への驚き）** ・蛍光塗料のブラックライトで光るという特性を知り、自分の２種類の絵の具を重ねた作品がどのように光るのか確認したがる。光る場所と光らない場所を発見する **（描く道具としての未知）** ・蝋燭の側面で描いたかすれた線 ・蝋燭の縄で描いた線は思い通りにならない ・手で絵の具を伸ばす ・ビー玉で削ると下に重ねてきた色が出てくる ・ブラシでスパッタリングした後、ブラシで塗り広げる。スポイトで削る
③ ④	**（部屋全体を暗くすると光が引き立つという経験）** ・部屋が暗いからより明るく見える **（自分の知っている銀河と比べている）** ・銀河まではいかなかった気がする **（第①②時に混ぜた時の手ごたえ）** ・蛍光塗料はトロトロしていてすぐに固くなる	**（暗い所と明るい所での見え方の違い）** ・黄色がブラックライトを当てると緑色に見える 「暗いとガチでブラックホールみたい」 「明るいとほこりみたいにふわふわっ」

③ ④	**（段ボールの全体を塗りつぶしてブラックライトを当ててみた経験から）** 「これすげぇー。これは宇宙に見える。これは宇宙に見えない。分かった。先生。ブラックライトってブラックだからさ、黒じゃん。段ボールはブラックライトが当たると青紫になるからちゃんと黒くなる。だから全部塗らない方が宇宙っぽくなる」 「めっちゃ、綺麗！やっぱり全部塗らない方がいい」 	**（第①②時では、試さなかった表現）** ・様々な表現をした後にブラシやスポンジで一面に絵の具を塗り広げる  **（なぜ塗った面にしましまの模様ができるのか不思議に思う）** ・手で段ボールの凹凸を確かめる 「段ボールがなみなみしているからしましまになる」 **（友達の表現を試したくなる）** 「これ誰の？どうやってつくった？」 ・ブラシと網の点の美しい表現に魅力を感じる
⑤	**（第①②時の経験から）** 「床にビー玉転がしたら絶対面白そう！」 ・蝋燭で線を描こうとするが「変になっちゃった」と言ってやめる ・「何しようというとしたくなる。これを」と言ってビー玉を取る 「ビー玉が転がってできる線めっちゃ面白い」 ・ビー玉が予想できない動きで、線を描く面白さを感じる 	**（第①②③④時では平らな面でしか表現していない）** 「壁にやってみたい！スポイトは銃みたいで面白い」 ・元々知っているビー玉の面白さにスプーンで転がすことで描かれる線の表現がもっと面白くなることを知る。 「パスし合うとその線が返ってくる」 ・絵の具からビー玉を発射する 「すごくない？？ この線！！」
⑥ ⑦	**（第⑤時の経験から）** ・第⑤時で一緒に活動していた B 子に「パスする」と言われ、黄色を使ってビー玉打ちを始める。B 子は「こうすると流れ星みたいになるんだよ。星の一種」と意味づける。前時で楽しくパスし合うことでできる表現が綺麗だからよいと考えている。 **（自身の鉄道の知識を生かして）** ・SL づくりに加わると自分のイメージした煙突や列車が止まる駅の場所を考える **（大好きな蛸の色）** ・蛍光塗料の赤のみで描く	**（ずっと床に描いていたけど、大きな段ボールに描いてみたらどうなるのだろう！）** ・宇宙の中の秘密基地を想像し、大きな段ボールに描いていく

⑨	**（第⑧時のみんなの作品から積み木のようにした方が作品を生かせると感じる）** ・高く積み上げていく ・積み上げていくと描かれたものが綺麗に見えると鑑賞から考えた ・積む順番を変えてみようとする 「もっと違う場所にもつくっていこう」 **（第① ③時の経験から）** ・下に何もない段ボールを置いて浮いているようにしようとする 	

イ　図画工作科部が考える『その子らしく学ぶ』

A 男が対象と自分を結びつける瞬間を起点に分析することで、『その子らしく学ぶ』には３つの学びの始まりがあり、その後、学びのサイクルが繋がっていくことが分かってきた。以下に３つの学びの始まりについて記す。

○出合いから始まる『その子らしく学ぶ』

第⑤時に図工室（大きな一つの段ボール箱）という対象に出合った A 男は直感的に床や壁に描きたいと考え、すぐにでも動き出したい様子で「いえーい、すげー！これ。こういうのが一回やってみたかったんだよね。」と発言している。続けて第①②時の経験を基に「絶対（床に）ビー玉転がしたら面白いんじゃない？」とビー玉を用いた表現に直感的に魅力を感じている。しかし、それと同時に「壁に描いたらどうなるのだろう」という未知の表現に対する面白さを直感的に感じている。それは、第③④時で自分の星を描く際に自分が描きたい段ボールの面を必ず上にしていたためである。そこで、活動開始時にスポイトを用いて壁に描く。「わぁー！」「銃みたいに楽しい」と発言していることから行為自体には面白さを感じたようだが、表現的なよさは感じずに３回でやめる。その後もブラシ１回、スポンジ１回、蝋燭１回と試すがすぐにやめる。蝋燭は図工室という支持体の大きさの中では映えないため、自分が表現する道具としては選択していかなかったと考える。

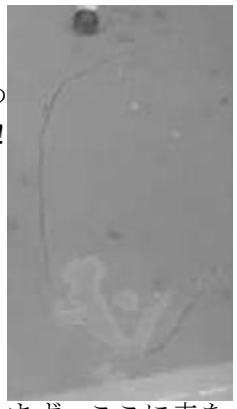
○経験から始まる『その子らしく学ぶ』

第⑤時でスポイトや蝋燭などでは、自分の描きたい線が表現できないと判断した A 男は「これ絶対ビー玉で転がしたら面白そうじゃない？」と友達に始める前に話していた。その直感を働かせ、「何しようというとしたくなる。これを」と言いながらビー玉を手に取る。第①②時でビー玉を使うと滑らか且つ動きのある線が自分の意志とは別に出来上がる面白さを経験していた。この経験を基に図工室の床にビー玉を用いて線を描いていく。しかし、第⑤時の A 男は指に湿布を巻いており、手を汚したくなかった。そのため、第①②時とは違い手ではなくスプーンを使ってビー玉を転がす。スプーンで押した余韻でビー玉が勝手に転がり線を描く様を見て興奮しながら、「めっちゃ面白いよ！ほら！」と B 子に伝える。元々感じていたビー玉で描く線のよさにスプーンで転がすことでより予測できない動きをするという未知の面白さが加わった。始めは、スプーンの上でビー玉に絵の具をつけて描いていくがもっと

A :「スプーンの上で混ぜてから、これごと転がす。」

A :「見てー B 子。これ、めちゃ面白いよ！ほら」

（自分がスプーンで転がした余韻でビー玉が勝手に転がり線を描く様を見て言う）



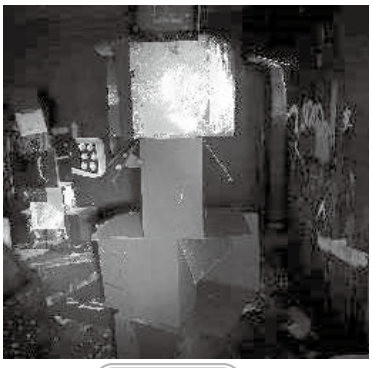
A :「見て。いくよ。まず、ここに赤を置く。」

A :「ガチ B 子面白れー。B 子、ガチでこれ面白いよ。」

線を濃くし動きがより表れるように床に絵の具を垂らしてからビー玉に絵の具をつける。転がるビー玉を追いかけながら広範囲に線を描いていく。一度、同じグループのＢ子に「パスをしよう」と関わりに行き、二人で１ターンだけパスをする。

Ｂ：「本当だ。」
Ａ：「見てＢ子いくよ。」
Ａ:「色なくなった。」
（色をつけに絵の具の場所に戻る。）

○直感から始まる『その子らしく学ぶ』



第③④時で絵の具を塗っていない段ボールにブラックライトを当てると青紫色に見え、その色に宇宙の闇の部分を感じたＡ男はその経験を第⑨時で生かそうとする。みんなの星を高く積むことで宇宙の中に浮かぶ惑星を表現できると直感的に感じ、みんなに提案する。実際に図工室の中を暗所にして、星を積み上げたり組み替えたりしながら製作と鑑賞を繰り返して「みんなの宇宙」という対象に関わっていった。そこで実際に何も塗られていない段ボールを下に置いて惑星が浮かんでいるように見える表現に出合い、Ａ男の中に確かな経験が還っていった。その後、時間が許す限り同じ表現をいくつか友達と一緒につくりあげていった。

以上のＡ男の姿から図画工作科では図１のようなサイクルで対象と自分を結びつけているのではないかと考えた。このサイクルがその子らしく学んでいる状態であると仮説を立てた。抽出児の３つの姿のように学びの始まりはその時々で変わるが出合いが経験を生み、経験が直感をつくっていくのは変わらないのではないだろうか。

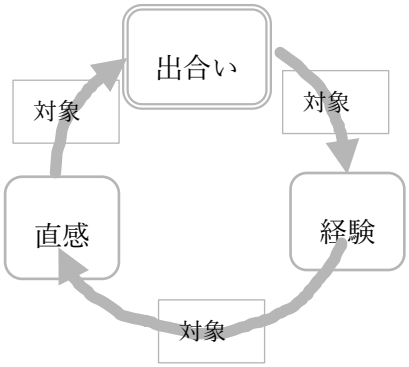


図１　サイクル

③図画工作科『その子らしく学ぶ』研究の可能性や価値～教科研の実践より～

上で述べたようなサイクルを追うことでどのような経験や直感がつくられているのかがみえてくる。その子が対象と結びつき、対象からその子に還ってきたものはその子の中に体験として残る。その体験が直感と結びつくことでその子の経験になっていくだろう。どのような出合いがその子にとっての経験に繋がるのかを考えた授業を構想していくことでその子の経験を豊かにしていくことができるのではないだろうか。そして、その子が最大限『その子らしく学ぶ』環境を保障することにも繋がると考える。そのように学ぶことは、その子が学びを自分のものにし、経験が豊かになればなるほどその子の感性が磨かれていくと考える。

（２）５年生「つなげて！つなげて！！」（Ａ表現（１）ア　造形遊び）

教科研や夏研を通して、図画工作科における教科の本質について改めて考えてみた。その結果、私たちが唱える図画工作科における学びの中の「その子の造形的な視点が磨かれその子の見える世界が変わり人生が豊かになる」という一文が図画工作科の教科の本質を端的に表していると考えた。そこで協議会では、教科研から見えてきた図画工作科部の考える『その子らしく学ぶ』における出合い、経験、直感の関係について分析をかけると共に、『その子らしく学ぶ』ということが教科の本質に繋がっていくのかを検証した。

①　題材の概要と単元の実際

その子が様々な見方を発見したり、表現の意味や価値をつくりだしたりすることのよさを感じることは、その後の学びや生活を豊かにしていくことに繋がると考え、本題材を構想した。

本題材で扱う材に出合い、材の特性を発見するなど、子ども自身が体験を積み重ねていくことは、その子の直感を生み出すことに繋がると考えた。第①②時の最初に、垂直線と水平線を生かし、原色と無彩色の組み合わせで描かれた作品〈ピート・モンドリアン作　ブロードウェイ・ブギウギ〉に出合った。直線と厳選された色の組み合わせでつくられた作品であることを確認した。そこで、端材を使用して「私のモンドリアン」を製作していく中で、材に触れていく。段ボールの中にたくさんの材が用意されており、取り出したり、手を入れて材が集まった感触を確かめたりすることができる場に出合った。最初は、手を入れて感触を確かめたり、色の種類があることにも気が付き、色ごとに分けようとしたりする子もいた。また、端材を箱の中に敷き詰めたり、長さや色の特性を捉えながら、ピッタリとはまるように試行錯誤したりして造形活動に取り組んだ。ここで、長さや色の特性を体得していった。作品をつくりながら、材の特性から造形活動の可能性を見出して、材をジェンガのように組み上げたり、材が木目柄のものもあるため、ログハウスのようなものをつくろうとしたりする子もいた。こうして、作品をつくりながら、材でできる表現の可能性がその子の中に体験として積み重なっていった。

第③④時では、端材と針金が利用できる場と、「つなげて！つなげて！！」という題材名に出合った。第①②時では敷き詰める形で表現していたため、針金を通すことができることを知り、通してみようと動き出した。さらに、針金に端材を通すとどのように曲がるのかも試してみたくなり、様々な形をつくったり、自由に曲げたりした。その中で、針金よりも硬くなったり、割れやすいとおもっていた端材が割れにくくなったりするという特性に気が付いた。

端材と針金が組み合わさってできる新たな材の特性に十分に触れながら、図工室に置かれているイーゼルも生かそうと考えた。針金は曲げることができるという経験と結びつけながら、子どもはイーゼルに絡ませたり、イーゼルから組み合わせた材をぶら下げたりした。また、組み合わせた材を伸ばしていくことに面白さを感じた子は、つなげる先を探し出していた。「これ、ここにつなげられそう」「ここに巻きつけられそう」などと新たな発見をしていきながら、しだいに主題を見

表２　単元の実際

時	学習内容
① ②	〈ブロードウェイ・ブギウギの鑑賞〉 ・カクカクしている・直線が道路みたい ・QR コードみたい・色が４種類 〈私の「モンドリアン」を作ろう〉 ・同色で種類分けをする ・端材の直線を生かして線のようにして箱の中に並べていく（敷き詰めのイメージが湧かない） ・これどうしたらきれいにぴったりはまるかな
③ ④	〈つなげて！つなげて！！〉 ・（端材に針金を）通せそう！ ・イーゼルの横幅と針金の長さを合わせながら長さを取り、木目調の端材を組み合わせる ・高い位置にあるひっかけられそうなところを見つけて、端材と針金から生まれた新たな材をひっかけて表現の可能性を広げている ・主題が見出せず、何をしようか悩む ・友達の様子を確認しにいく ・縄跳びをつくり、実際に跳んでみる ・端材を束ねてみる ・イカダになっちゃった ・同じ色を合わせて虹を表現する
⑤	・図工室を再度確認しながら使えそうなものがないか確認する ・もっと長く針金をのばそうぜ！ ・図工室のカーテン止めなども利用しながら針金を張り巡らせ、ロープウェイを表現しようとする
⑥	〈使えそうな場所を共有しよう〉 ・（カーテンのフック）このフックに何かをかけて橋とかつくれそう ・四角いところをつけて空や飛行機をつくる（金網とその先の景色を合わせて表現に活用しようとする。） 〈続きをやっていこう！〉 ・ジェットコースターをつくろう！ ・赤色の端材集めを手伝う （主題が浮かばず、進みだせない）

出していった。また、「なんとなくだけど、この組み合わせがいいと思う」「この色を組み合わせてハロウィン」などと色からイメージをもって繋げていく子もいた。自分の主題を表現するために使えそうなものがないか図工室内を探す中で、金網を見つけて使用する様子もあった。第⑤時には、改めて表現を見直し、更に図工室で使えそうなものがないか確認し、棒や金網、机、椅子などを考えた。子どもは主題をもって、自分の表現に活用できるものをそれぞれ見つけて動き出した。第⑥時には、図工室で使えそうな場所を共有してから自分の表現に再度向き合った。第⑦⑧⑨⑩時にはそれぞれの主題の表現に取り組みながらつくりかえていった。本題材を通して、様々な材や空間が結びつくことで表現の幅がより広がっていくことを感じていった。

⑦ ⑧	〈つなげて！つなげて！！完成を目指そう〉 ・自分の表現に使用する赤を探す ・教師から金網の檻を紹介される ・金網の檻を１つ使いイーゼルとの高低差を利用して滑り台を作る ・金網を活用して、BBQ を表現する ・イカダ、難しいんだよな ・だめだ。何も思いつかない ・３階からグラウンドに向けてロープウェイをつくろうとする ・船をつくろうと試みるが、端材を針金に通している途中で針金が途中で切れていることに気が付き、やめる
⑨ ⑩	〈つなげて！つなげて！！最終回〉 ・赤い長い縄のようなものが出来上がり、階段で長さを確認している ・教師に、「手すりに絡ませたらおもしろいかもね」といわれて挑戦してみる ・金網まで伸ばしてみるが長さがもっと欲しいと感じさらにつくろうとする ・友達を手伝いながら、丸い筒を見つけて使えそうだと考え持ってくる ・「筒に巻きつけたら同じだね」と先生からのかかわりを受けて、やってみる ・階段の上から吊るす ・天使の羽に合わせステッキをつくる ・図工室の一角に椅子を積み上げて、端材を広げて、秘密基地が隠れているような表現をする

② 抽出児のプロセス

ア　経験が生む直感と経験が及ぼす影響

C 男は第⑤時の開始時、第③④時の経験から端材を束ねることから始める。前時では、イカダをつくり満足した様子があった。第⑤時では、次に何をしようかと主題を探していたのだろう。そこで、前時の経験からくる直感を働かせ表現してみるが、出合った表現が C 男にとって魅力を感じるものではなかったのか、その表現をやめる選択をする。そして、少し悩んだのちに、船という主題に出合い表現しようと動き出した。しかし、ここで手を止めて、遠くを見ているような様子をみせた。きっと、どのように主題を表現したらいいのか技法を考えていたのではないだろうか。その後、端材を並べて第③④時でつくったような土台を製作した。ここでは、前時と異なり、端材を横並びにまとめて針金で止

C 男：「船！」
C 男：「いいこと、おもいついた！」
　　M 男に何かを言われたが、
C 男：「いやいい！」
手を止めて遠くを見るような目で教師の方を見ていた

どうしようか考えている

端材を繋ぎ合わせて、第③④時でつくったような土台をつくった。今回は一本を通した端材ではなく、単純に束にしてまとめていた。
つくり終えたあと、端材に針金を通して、板のようにしていた。（第③④時の経験）
板が出来上がってから、伸ばした。
それを再度板の状態に戻し、端を針金で止めようとするが、またやめて、伸ばした。

めようとした。その後、試行錯誤するが、主題からイメージする表現がうまくできず悩み、その主題を表現することを一度諦めてしまう。C 男は細かい作業があまり得意ではない。実際に試していく中で、自分には無理だと感じたのだろう。

このような姿は第⑥時の主題を思いついて動き出すが、途中で針金が切れてしまうことで諦める姿やイーゼルに巻きつける表現には挑戦するが、網などの細かいものに巻きつけることは提案されても挑戦しない姿など、C 男の学びのプロセスの中で何度も表れていた。C 男はこれまでの経験から自分の苦手な表現を自然と除外してしまう。C 男は写実的に表現したいと考える傾向がある。今までの図画工作科の中で、リアルなものが価値あるものとして評価されるという経験が積み重なっているからであろう。

C 男：「うーん。」
C 男：「うーん。」
C 男：「ま、いいや。」
伸ばして、全部抜いた。

友達の方を見ている。

C 男：「何がいいかな。」

針金に再度、木目の端材を通していった。
端材を通したものをつくりながら、再度周りを見ていた。（何かできないか考える）

経験からくる直感は、浮かんだ主題の表現を止めることがあるのかもしれないと推察できる。経験は表現を楽しむ直感に繋がったり、時には、直感的にその表現を除外するということにも繋がったりするほど重要なのだといえる。その子が造形活動においてどのような経験をしているのかをとらえていくことはその子の直感を働かせて様々な表現を楽しむことを支えることにも繋がるのではないだろうか。

イ　立ち止まりに目を向けて

第③④時の終盤、C 男は周囲を見ながら何をつくろうか立ち止まった。「うーん。」と悩みながら周囲を見た。C 男は周囲から情報を得ようとしているのだろう。

図画工作科において次のような場面は多々ある。主題に悩む時には、周囲の表現活動が子どもの主題発想の手がかりとなり、周囲から得た情報を取捨選択しているのだろう。C 男の周囲では、端材を使ったロープウェイや端材をロープにしてジェットコースターとして表現したものがあった。それらから発想を得て、乗り物をつくろうと考えた。その後、箱を利用して自分の主題を表現しようと動き出した。箱に針金を巻きつけて主題を表現しようとしたが、箱の強度が弱いため箱型の形が崩れてしまった。そして、自分のやってみようと、おもったこととは異なるが自然と手が動き、端材に針金を通した。通しながら、やはり友達の表現をじっくり観察していた。乗り物をつくっている人たちから主題

C 男：「次何つくろうかな。」
M 男：「案がない。つくる案がない」
授業者：「何つくるの？」
C 男：「まぁ、なんかつくる。案ないけど…」

C 男：「一回こんぐらいの長さに切って、しまって…」
M 男と教師が話しているのを見ていた。
C 男：「先生、こういう箱みたいのもらえない？」

C 男：「それで巻きつけて乗り物みたいにしよう。」
（自分のイメージしたものは、針金と材では表現できないと考え、箱を使おうとしていた。）
C 男：（M 男に向かって）「二人でつくる？」

M 男はやらず、C 男のみでつくり出した。

箱に針金を巻きつけるが箱の強度が弱くへこんでしまうため、箱を使用するのをやめた。

発想を得て、土台が正方形の形をした乗り物づくりに取り掛かるが何度か失敗をする。端材を針金に通して折り曲げて板のようにできそうだと経験から直感を働かせ、正方形の板を表現した。最後針金を巻きつけることで安定させて板を完成させた。乗り物の土台である板はできたものの、その先どのように乗り物として表現していくのか悩む。再度ここで、周りを見ながら情報を得ようとしている様子がある。しばらく考えた後にC男は、端材で板を表現した際に巻きつけた針金の間にさらに端材を挟み込む表現をする。乗り物のイメージから床のみではなく何かに囲まれていることを表現したいと考えるが、その方法が思いつかないのだろう。そこで、２段目をつくっていこうと動き出した。それを固定するために針金をさらに巻きつけていく。ここで、C男は、「もっときつく縛らないと」「だめだー」「それかもっと本数を増やす？」と板の表現の２段目が固定できる方法を試行錯誤しながら探していた。安定すると「ここは軽く、もっと縛りつけて…」と声を大きくし、その後「ずいぶんと、派手なイカダになっちゃった」と発言した。ここで、C男の中で主題がはっきりしたことで、さらに表現への動き出しが活発になる。イカダに棒を建てようとして針金の巻きつけ方を試行錯誤していた。完成するとさらに、旗をつけようと消しゴムのカバーを利用した。ここでテープを利用して取り付けようとするが、先生が「テープなしでできないかな？」というかかわりをして、通し方をアドバイスした。すると、それをもとに旗を完成させ、「できた」「ニコリ」と発言をして、友達に見せた。

C男は立ち止まるときに、「うーん」「どうしようかな」と考え、周囲から情報を得て考えようとする。図画工作科において情報を得ようと周囲の表現を自然と鑑賞することはその子の主題の発想を助けたり、動き出しの支えに繋がったりする。また、C男は悩みながらも経験からくる直感を働かせながら、材と結びつき、表現の可能性を新たに見出していくことで今回の主題

箱の中に木目調の端材を揃えて入れ、縦と横の長さをそろえた正方形の乗り物の土台をつくろうとした。

針金で束ねようとするがうまくいかない。
先に床に針金を敷いて、上に材を並べた。

C男：「まずは、土台～」
ずれてしまいうまくいかない。
材を抱えて束ねようとするがうまくいかない。

３本針金に通し、折り曲げて一枚の板にした。さらに、端材に針金を通して板にしてから針金を巻きつけようとして試行錯誤する。

C男：「は～。これだけで、精一杯だよ。う～ん。何がいいかな～。」
周囲をみる。

C男：「何がいいかな～。」
悩み、周囲をみていた。
端材を針金に挟み込んで２段目をつくる
ぐるぐるに針金を巻くが材が抜け落ちてしまう。
C男：「だめだ。もっときつく縛らないと。」
針金を抜き出す。

C男：「だめだ。それかもっと本数を増やす。」
抜け落ちた所に本数を増やして調節していく。

ペンチも使いながら挟み込もうと試みていた。

C男：「ここは軽く。もっと縛りつけて！」

C男：「ずいぶんと派手なイカダになっちゃった。」
（残念そうではない言い方をしている）
C男：「イカダじゃない…」
つくったイカダに棒を立てようと試行錯誤している。

がみえてきたのではないだろうか。立ち止まりに目を向けたことで、C 男の図画工作科におけるその子らしく学んでいる状態をより顕在化させていくことに繋がった。

旗を製作しようと消しゴムのケースを利用する。
旗のつけ方について試行錯誤する。
C 男：「半分まで切ったら…」
旗をつけることができた。
C 男：「できた！」
「ハハ。」
「ニコリ。」

ウ　教師のかかわり

C 男は第⑤⑥⑦時と主題を見出せず、立ち止まっていることが多かった。C 男は周囲から情報を得て、自分の主題を見出せると感じていた授業者は、C 男と共に活動する M 男にかかわったり、また、周囲の表現に目がいくようにかかわったりした。しかし、C 男の立ち止まりの解消には至らず、主題について悩み、友達の表現の手伝いをする姿を見せた。そこで、第⑧時に授業者は、C 男が使えそうと感じていた野菜栽培用の網をもとに、イメージやできそうなことを C 男に話した。そこで、C 男は、本来何に使用する網なのかを知り、「朝顔？」等とイメージを少しずつ膨らませていった。その後、C 男はさらにイメージが膨らんでいったのだろう。「忘れ物を取りに行く」と行って教室に向かいながら、突如として、「いいこと思いついた！」と言って駆け足で図工室に戻ってきた。この時、思いついたものは「船」であったようだ。３時間分悩み、主題が見つからないことで主題を見出すことをあきらめていた C 男は授業者の直接的なかかわりがあり、再度主題探しへ意欲的になったともいえるだろう。授業者のかかわりがその子の思考を狭めてしまう可能性もあるが、子ども自身が表現の可能性を狭めて、どうにも動き出すことができずにいる時には、表現に繋がる具体的なイメージを示すようにかかわることも重要な環境設定になるのではないだろうか。

第⑤時の姿は上記の「C 男の姿の実際」を参照
第⑥⑦時
C 男は最初、一緒に活動している M 男の端材探しを手伝う。
しばらくして、廊下に出て表現を始めようとする。

C 男：「あ～何、つくろうかな。
イカダむずいんだよな。ここをこうして…楽なのがいいな…」針金を端材に通そうとしながらも M 男の動きを見ている。
C 男：「だめだ！思いつかない！」
しばらくして

C 男：「せんせい～。なんにも思いつかないです。『うんじゃ、なにが思いつくか繋げて考えてみよう。』って絶対言う。」
第⑧時
授業者がかかわる
授業者：「網とかネットとかに引っかかってるものが思い浮かばないんだよね。」
C 男：「うん。」
授業者：「ああいう、ネットってなんかで使ったことがある？」
C 男：「えーない。」

授業者：「あれ、2 年生が野菜で使っていたやつなんだけど。」
C 男：「あ～。使ったけな…。野菜…。あれっぽいの見たことあるけど…。なんか、花か分からないけど、つる伸ばすみたいな…」
授業者：「あ～。つる！つる伸ばすのなんだっけ？きゅうり？」
C 男：「そういうのもやったし、朝顔とかでもやったし。」
授業者：「そうすると、C 男がつくったやつ紐じゃん？つるもこんな形だよね？」
C 男：うん、うん、うん。（強くうなずく。）

４．　成果と課題

研究協議会では、教科研を通して見えてきた出合い、経験、直感を起点として授業を分析してきた。C 男は上記で述べたように、図画工作科における経験から自分にできそうな表現を狭めていた。また、未知の表現へ直感を働かせようとすることもあったが、これまで、より写実的なものが認められてきた経験が、やってみたいという直感からの動き出しを止めているように見える場面もあった。これらのことから直感をつくり出す経験が大きな影響を与えているのだといえる。直感を働かせ、そのまま動き出すこともあれば、立ち止まることもある。その際には、今までに図画工作科の中でどのような表現活動をし、どのような表現を価値あるものとしてきたのかということが大きな影響を与えていることがＣ男の姿から分かった。今後はその子に蓄積されている教科における経験をとらえていくことで、『その子らしく学ぶ』を支える環境設定に生かしていくことができるのではないのだろうか。

５．　おわりに

私たち図画工作科部は、『その子らしく学ぶ』についても更新をかけていき、『その子らしく学ぶ』ことの子どもにとってのよさを明らかしていきたいと考え、研究２年次の実践を行ってきた。実践や校内での協議を通し、その子らしく学んでいるサイクルを見出したり、図画工作科における教科の本質を見つめ直したりしてきた。その結果、図画工作科における『その子らしく学ぶ』とは以下のようにいえるのではないかと考えた。

その子の造形的な視点が磨かれその子の見える世界が変わり人生が豊かになる

造形的な視点の「造形的」とは色や形等のことである。新たな造形的な視点に出合い、表現してみることを通して、その子の造形的な視点が磨かれていく。その子が今まで何気なく見ていた世界に価値あるものや魅力的なものが増え、見える世界が変わっていく。そして、その子の見える世界が変わることでこれまで見えていた世界がより広く深くなり、その子の人生が豊かになっていくことに繋がっていくだろう。

教科研で色や光の効果に存分に触れた２年１組の子どもの造形的な視点は磨かれていたといえるだろう。シールアートでは色を点描画のように点在させることで混色を表現したりシールの裏の色を利用して一枚の透明シートで表裏の２作品を表現したりした。花紙を扱った際には、液体のりを組み合わせることで生まれる色や質感の変化、光を通した時の色の組み合わせや与える印象の違いにまで、目を向けられるようになった。２年１組の子どもは『その子らしく学ぶ』ことで徐々に見える世界が変わり、人生を豊かにしていっているのだろう。

図画工作科における『その子らしく学ぶ』サイクルにおいて重要だといえる過去の「経験」をとらえていくことで、学びが顕在化し、次に繋がる「経験」もとらえやすくなる。また、学びが繋がるような「経験」を重ねていくことができる環境を整えていくことも大切になると考えている。

今後は、「経験」を起点に子どもの『その子らしく学ぶ』サイクルを分析し、対象が変わらず学び深めている時と対象が変わり次のサイクルへと広がっている時について考えていきたい。